

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

青空の下で行われた中信高校新人大会

今年の中信地区の新人大会は、4年ぶりに木曾地区を会場にして行った。初日は、木祖村やぶはら高原を舞台に、男子は7校15チーム、女子は1校1チームがオリエンテーリング競技を行った。当日は雲一つない快晴。こだまの森キャンプ場を起点に、選手は白菜畑やスキー場の中を、地図を片手に北に南にとポストを捜しながら、秋の一日、日頃培った成果を競い合った。結果は、今年のインターハイで好成績を収めた松本県ヶ丘が、その勢いをそのまま引き継ぎ、男子の1位から3位を独占、唯一参加した女子チームとともにすべての賞状を手にした。特に優勝したBチームは100点満点と非の打ちどころがなかった。・・・お見事！

中信の新人戦は交流会も主眼に行っているが、夜は生徒たちが自主的に交流し、学校の枠を越えて親睦を深めた。翌日も天気は快晴。交流登山は会場を王滝村に移し、田の原から御嶽に登った。快晴の頂上からは、北アルプスをはじめとする県内の峰々はもちろん、遠くは富士山、白山まで見晴るかしながらのお鉢周りと二の池巡り。競技を離れた生徒たちの顔には、どの顔にも満足感が現れていた。



御嶽の山頂にて

私を育ててくれた二人の師——かわらばん 500号雑感

少し前のことである。きわめて私的なことであるが、高校の時の担任の小林俊樹氏から電話があった。氏は日本山岳会の古くからの会員で、僕に山の楽しさを教えてくれた恩師である。その先生の電話口の声が「大西、俺は嬉しくて電話した。お前のことが今日届いた山岳会の『山』（日本山岳会会報820号）に載っていた。江本（嘉伸）さんが随分高く評価してくれて書いてくれていたぞ。その件を今ここで読んでやろうか。」と弾んでいた。さすがにその場で読んでもらうのは遠慮したが、電話をもらった私も嬉しくてひとしきり最近の山談義に興じた。

江本さんからは、その数日前に連絡があり、会報「山」で私のことに言及される旨は承知していたのだが、内容の詳細は先生が早速送ってくれたファックスで知ることができた。江本さんの話は、かわらばんで紹介した池工山岳部の夏合宿に触れながら、高校

山岳部における指導者の役割の重要性を論じたものだった。(これについては日本山岳会のホームページ上の、<http://jac.or.jp/info/iinkai/kaiho/1309YAMAr1.pdf> で閲覧が可能なので、興味のある方はご覧ください。) ちょっと気恥ずかしいが、江本さんは「つくづく山の世界にいい指導者がいることの大切さを感じる」と評価してくださった。しかし、考えてみれば僕が今あるのも高校時代に小林先生に出会ったおかげであり、まさしく「いい指導者がいた」からこそである。教員になってからも、小林先生は私にとっては、未だに越えることのできない遙か先に行く目標である。

まだまだ発展途上の私ではあるが、そんな私が細々と続けてきた「かわらばん」も500号を迎えた。そもそも「かわらばん」は、自分にできる範囲で少しでも高校山岳部の活動に益することがあればとの思いではじめたものである。その原点は、教師になりたての初任の長姫高校で出会った私にとってもう一人の恩師である勝野順先生の始めた「信高山岳会」の活動にある。勝野先生は、高校山岳部の顧問仲間の情報共有の場として「信高山岳会」という社会人山岳会を作り、そこをベースに6次にわたる「長野県高校生訪中登山交流会」や「中ア経ヶ岳登山道の復活作業」などの事業を積極的にリードし、「高校生に夢を」という理念を分かち合う多くの人材を育ててくれた。私自身信高山岳会の会員として教師としてまた山やとして、さらには一人の人間として育ててもらったが、その恩返しとして僕にできる役割は何だろうかと考えた末に始めたのがそもそものきっかけである。立場上、私のところに集まってくる多くの情報を死蔵させずに活かせる方法を考えた時、仮に拙い文章ではあっても、メールという媒体を使うことにより読んでほしい人（もともとは高校の山岳部の顧問の先生方が主体だった）に送ることが可能となる。そして読んだ人とは双方向の情報伝達ができ、そこから得た情報をまた発信もできるし、自分自身も成長できる。

二人の師は、どちらも私にとってあまりに大きい存在ではあるが、そんな良き師に高校時代に、また駆け出しの教師の時代に出会えたことは僕にとって極めて得難い経験であった。私は私のできる範囲で、これからも少しでも多くの生徒に山の素晴らしさを伝え、そして夢を語り続けて行こうと思う。

編集子のひとりごと

ちょっと、しつこい話になるが、前回までのかわらばんに書いてから、GPSの動きが気になっている。先週日曜日(6日)に餓鬼岳へ登った時の帰りにも、白沢でオレゴンがかなり怪しい動きをし、沢の右岸を歩いているときに左岸を通っているような軌跡を示した。やはり同行したのは、焼岳の時と同じ山内氏だったが、氏のオレゴンもロスト気味。スカイプロット(衛星受信状態)を見ると、衛星の配置が極めてアンバランスな上に、仰角が十分に確保されていないような深い沢地形の中でのことだった。前回のこともあったので、今回は準天頂衛星みちびきを拾えるEtrex 20Jも持参したが、こちらの方は正常な動きをしているのが、一目瞭然であった。僕のオレゴンがすでに老朽化しているという個体としての原因もあるのかもしれないが、その前日の土曜日(5日)に中央アルプス烏帽子ヶ岳へ登った時はスカイプロットにも適度にばらつきがあり、オレゴンでも20Jでもほとんど差異がなかった。もともと仰角が十分に確保できない沢(とりわけ深いゴルジュなど)ではマルチパスにより誤差があることは承知していたが、その限界を理解した上で使うことが必要だと改めて認識した次第である。(大西 記)